

おまけSS 鳥籠、その周辺

（幼馴染と媚薬と出られない部屋。LTL閑話）

※当おまけSSは本編終了後のお話です。本編視聴後の閲覧を推奨致します。

石流家の家族構成は父母息子の三人だ。しかし、時たまその家族構成の人数が変動することがある。

「ふぁーあ……」

今日は土曜日、休日である。ソファから起き上がりと伸びをした保健室の先生兼燕の叔父こと石流竹千代も、ご多分に漏れず休日であった。竹千代が目を開けた先には日本酒、ワイン、ウイスキーの瓶がダイニングテーブルの上に所狭しと並べられている。

「兄さんも僕も結構飲んだな……はは」

竹千代も、竹千代の兄こと燕の父親も酒豪である。竹千代が石流家に遊びに来る度に空いた酒瓶が山になる程だ。

「さあて片付けるかあ」

寝癖がついた髪の毛をいじりながらソファから立つ。

「先生、おはよう」

リビングの扉が静かに開いた。小さな人影が一つ、ひょっこりと顔を出した。

「ことりさん」

竹千代が呼ぶ「ことりさん」とは燕の母親のことだ。背丈は成人女性にしてはやや小柄で、もうすぐ独り立ちできそうな一人息子が居るようには見えない何とも愛らしい顔立ちをしている。燕の歳の離れた姉だと言われても信じる人間もいそうな程だ。燕の身長の低さと気の強そうな顔は母親譲りなのだろうと、燕をよく知る人がことりを見た時にまず思うことの一つだ。燕と同じく真ん中分けで、肩甲骨が隠れる程の長さの髪の毛は後ろで一つにまとめられている。結われている髪の毛が後ろに隠れていると、燕とそっくりな髪型なのだ。

「はい朝ご飯。しじみのお味噌汁付き」

木製のトレーに味噌汁、ご飯、サラダ、ベーコンエッグが乗っている。健康的かつ理想的な朝食だ。しじみの味噌汁は大酒飲みの竹千代を心配して作ったのだろう。

「わーいっ美味しそうー!」

目を輝かせながら両手をあげる仕草はとても三十を迎えた男性には似つかわしくないが、竹千代の童顔さや無垢さが年齢をかき消す。

「というかことりさん、先生って呼ぶのはよしてくださいよ。学校じゃないんですから」

燕の母親と竹千代は十程度歳が離れている。かといって、自分の旦那の弟となれば碎けた感じで話す気にもなれず、（とある理由も一因ではあるが）名前にさん付けするのも憚られて、ことりは竹千代のことをつい「先生」と呼んでしまっていた。

「気にしない気にしない。はい、食べて」

「いつもいつもすみません」

にへら、と笑いながら竹千代は箸を手にする。

「一人暮らしで不摂生して体調崩されているよりよっぽどいいですよ」

これは嫌味でも何でもなく本心から出た言葉だったのだが、しまったと言わんばかりにことりは口に手を当て、そのまま思わず竹千代の左腕を見ってしまう。服によって隠れてはいるがその下が「ボロボロ」になっているのは、家族ぐるみの付き合をしている石流家には周知の事実だ。竹千代もバレていることが分かつてはいるが、深く気にしないようにしている。気にしたところでどうにもならないし、隠そうとしたって何かしらのきっかけでバレてしまうわけなのだから。

ことりは気を取り直して言葉を続ける。

「それに、燕の面倒いつも見てもらってますし、気にしないでください」

「そんなー。僕にできることがあればいつでも言うてください、僕も燕ちゃんと遊んで楽し

いのでー」

「先生は燕の本当の兄みたいなんだから」

ことりが燕の姉に見えるのと同じく、竹千代は燕の兄に見える程見た目も似通っており面倒を見ている様は正しく実兄だ。

「しかしあの子、先生が断らないからって無茶振りするんだからもう」

ことりは眉をハの字にして頬に手を当てる。

「あー、あはは。授業終わってすぐに保健室来て、どっか行きたいから車出してーなんて言われた時は参っちゃいましたね。まあ出してあげちゃいましたが」

「甥っ子との夜のドライブも良いもんですよ。次の日が休みならば、ね…」

\*

燕がわがままを言い出したのは週の中日である水曜日だった。竹千代は中身がどうであれ、メンタルがどうであれ、これでも一端の三十路の社会人だ。できれば出かけるのならば金土日のない方がいい。言うまでもないだろうが、仕事に差し支えるからである。体が年々衰えつつあることを自覚してはいるものの、しかし甥のお願いには逆らえないのだ。竹千代は燕の言うまま車を出し、高速道路に乗り、テレビで取り上げられていたSAに寄って

名物のソフトクリームを二人で食べたのだった。

竹千代にはコンビニで売っているお高めのソフトクリームの味と区別が付かず、「これで喜んでくれたのかなあ」と少しだけ心配になってはいたがそこは要らぬ心配だったように目を輝かせながらもぐもぐと食べていた燕を見て安心したような、なんだかなあというようなそんな気持ちになってしまった。燕はあつという間に食べ上げ、口を拭くと。

「叔父さん、ありがとう」

と一言、そっけなく竹千代に告げたのであった。竹千代の反応はこれまた言うまでもない。仕事帰りに長時間車を走らせて疲労困憊だった竹千代は燕の一言ですっかり元気になってしまい、調子に乗ったのかじゃあもう一つ遠くのSAに行こうかということドライブを続行したのだ。それからなんだかんだで時間が過ぎ、石流家最寄りの高速道路の出口を通ったのはなんと日付を超えてからだった。竹千代は眠い目を擦りながら運転をしていたが、かたや燕はというと助手席でスヤスヤと寝ており、それを見た竹千代は文句の一つでも言うてやりたくもなかったのだが、赤ん坊の頃から面倒を見ている甥っ子の寝顔を見ているとなんだか妙に優しい気持ちになってしまふのだった。

「本当に君は昔から変わらないな」

赤ん坊の頃も、今も、寝顔は変わっていない。よく自分に憎まれ口を叩いて、年々口の悪

さに磨きがかかってくる燕に思わずため息をついてしまうのだが、こういう可愛いところを見てしまうと途端に全てを許せてしまうのも事実なのだ。

「まあいいか」

竹千代はラジオのボリュームを下げ、燕の自宅である石流家に向かった。

\*

「もーあの子は本当に先生にばかりわがまま言つて。親には癪癪あげることわがまま言うこともしないくせに」

「あのくらの歳の子は寧ろ親に当たるなんてできませんよ。僕に当たれるだけまだ良かったです。燕くん、正直友達が多いタイプではなさそうですね」

竹千代は苦笑する。

「内に溜めておくタイプだと後々手が付けられない事態になったりもしますし、あのくらいでいいんですよ。発散できる時に発散させておかないと」

「保健室の先生が言うと言得力があるわあ」

「これでも一応そういうのも専門にやりますからね」

また一つ竹千代は苦笑をした。

「でも、成績も素行も問題無さそうどころか優秀な子ですし。そんなに心配することないですよ。これもことりさんの教育の賜物だ」

そうかしら、とことりは小首を傾げる。

「それに、燕くんにストレスの捌け口にされるなら歓迎ですよ。あんなのかわいいもんです」

竹千代の言葉に嘘はなかった。理由がどうであれ、自分を慕ってくれる甥は可愛いものだ。

「そう思ってくれているなら助かりますけど…」

母親としては心配が尽きないのだろう。重たいため息を一つつく。

「あんなんで将来結婚できるのかしら。背も私に似て小さいし、顔も女の子みたいだし、性格も良いとは言えないし」

「燕くん、性格は良いですよ？だって幼なじみちゃんにはすごく優しいんですから」

「ああ、そうだ！幼なじみちゃん！」

バンと音を立つ程手を叩く。竹千代はそれにびっくりしたものの、すぐに平静さを取り戻す。

「なんか最近怪しいのよ、二人！」

「んーふふ、そうですね」

「やっぱり先生もそう思うわよね！？この前なんか珍しく燕が幼なじみちゃんの家に遊びに行ってたし！」

ことりは興奮しているのか頬を紅潮させていた。燕の恋愛事、母親として気にならないわけがない。

「お赤飯の用意、した方がいいですかねえ」

竹千代の読みは正しかった。つい先日燕達は手を繋ぐ、キスをするどころか初体験をあっという間に済ませてしまったのだ。しかもその後きちんと恋人として付き合っているなんて誰も知る由もないのだろうが、ここに居る二人は例外だった。近い人間には隠していようが、言わなからうが、不思議と伝わってしまうものだ。

「えーでもあの子そんなに早く手を出せるかしら？ああ見えて奥手よ、あの子」

「……二人して何話してるんだよ」

リビングのドアが音もなく開いていた。現れたのは話題に上がっていたご本人様だった。髪は梳かされておらず、トレードマークである真ん中分けも無く長い前髪が右目を覆っていた。体より少し大きめのTシャツ、ハーフパンツ姿で仁王立ちしている燕は、小柄ながらも



威圧感を二人に与えた。というのも、ご本人様にあまり聞かれたくない話題で盛り上がったから二人が勝手に怯えてしまったところもあるだろう。

「あ、あらー、燕起きてたの？今からご飯用意するわね」

「やーやー燕くん、おはよー。一緒に朝ご飯食べよーよー」

二人はあからさまに慌てる。竹千代は「ささー」と言い、自分の隣に置かれているダイニングチェアを引く。竹千代の前に置かれている朝食は一口二口つつかれた程度であり減っていないかった。それだけ燕の母との話に夢中だったということだろう。

「いいけどさ…」

燕は寝起きだ。いつもだったらなんだと突っ込んでいるところだが、エンジンをかけたばかりの脳みそでは怒る気力も無かったようだ。前髪をかきあげ耳にかけ、頬杖をつく。

「叔父さんも起きたばかり？」

「うん、まあそう、大体そう」

「ふーん…」

燕の母が燕の目の前に朝食を置く。

「ん、いただきます」

燕は手を合わせて箸を持つ。箸の持ち方も完璧、犬食いをせずきちんと器を持って、寝起

きだというのに背筋をしっかりと伸ばし、マナー良く食事をしている。

「そ、育ちが良い……」

その様子を見ていた竹千代の口から思わず一言漏れ出た。

「いや普通のことだろ、大袈裟だな」

これでもかというくらいにうんざりとした顔を叔父に向け、箸を進める。

「燕くん、口は悪いのにそういうところきちんとしてるよねえ」

「貶すか褒めるかどっちかにしろ」

やんやと言ひ合う間も、物が口に入っている時はきちんと飲み込んでから喋っているとこ  
ろを竹千代は見逃さなかった。

「褒めてる褒めてる、すっごく褒めてるよー、って……ん？」

竹千代は燕の顔を見て箸を止める。

「何、ジロジロ見て。よそ見しないでとっとと食えよ」

至極真つ当な正論で燕は竹千代に言う。

「燕くん、君さあ昨日お風呂入らなかつたでしょ。髪の毛ちょっとベタついてるよ？」

僅かながら燕の髪の毛は脂を纏っていた。といっても不潔すぎるという程ではなく、竹千  
代がちょっと気になった程度のものであったのだが。

「え、ああ」

燕は少しだけ恥ずかしそうに髪の毛をかきあげる。

「勉強してたらもう遅くなつてたのと、叔父さんここで寝てたし、うるさくして起こしたら悪いと思つて入らなかつた。飯食つたら入るつもりだったから、うん」

「そんな……君は優しい子だなあ……うつつ……」

アルコールが体から完全に抜けてないのもあるのだろう。竹千代は演技でもなんでもなく本気で涙ぐみ、「いい子いい子」と燕の頭を二、三回撫でた。

「なんだよ朝から気色悪いな……」

「オッサン」と呼ばれても致し方のない年齢の人間が自分の言葉を聞いて急に涙ぐんだことに思わず引いていたのだ。無理もない。そこで悪態づくことを我慢できない辺り、まだ年相応だということだろう。

「……先生、こういう時はちゃんと叱るべきだと思う」

やり取りの一部始終を見ていたことが先生にこっそりと耳打ちをする。

「無理無理、僕には無理ですってえ……」

二人共朝ごはんを完食し、手を合わせたところで竹千代が目を輝かせた。

「そうだ」

「なんだよ」

こういう時叔父さんは決まって変なことを言い出す、燕はそう思い身構えた。

「燕くん僕と一緒に風呂入ろっかー!」

「はあ?」

案の定だった。

「たまにはいいじゃない、水入らずで風呂に入ってもさあ!君が小さい頃は僕が君のことお風呂に入れてたりしたこともあるんだぞー?あ、僕頭と背中洗ってあげぎゃああ!」

箸先が竹千代の手の甲にブスリと刺さっていた。犯人は、勿論燕だ。

「俺、ちゃんと行儀悪いだろ。育ちなんて良くないしいい子でもなんでもないから」

竹千代の悲鳴なんて気にもかけずグリグリと決るように箸を突き刺す。

昔から他人に自分の出自に関してあれこれ言われることが多かった燕は竹千代に「育ちが良い」なんて言われたことを少しだけ根に持っていたところがあるのだろう。それを言われなかったら力加減がもう少しだけ弱くなっていたのかもしれない。

「ちゃんとの意味がおかしいよ燕くん痛い痛い痛い!ほんつとに痛いから!」

流石に可哀想になったのだろうか、力を緩めて箸をトレーに置く。それから燕は立ち上が

り自分の分と竹千代の分のトレイを持ち、台所に向かい食器を流しに置いた。きちんと皿に水を張って後で洗いやすようにし、ふん、と一つ鼻息を立てた。

「一人で風呂に入ってくるから、お前は絶対に入ってくんなよ」

そう言って浴室に向かった燕の背中を竹千代はただ見送ることしかできなかった。

「あーんさみしいなあ」

「今のは先生が十分悪かった気がするなあ……」

ことりは苦笑いをする、先生もつられて同じくあははと苦笑いをした。

「それに、あの子ケツペキっぽいところあるから、先生にお風呂入ってない？って言われてちょっと傷ついたのかも？燕、同年代の子と比べて大人っぽいところも勿論あるんだけど、中身はまだまだ子供なのよねえ」

「あーそっか悪いことしちゃったか」

あ、と竹千代は閃く。

「じゃあ次はそういうことを言わないまま一緒にお風呂に入することを提案しようかな。そうしたらきつと上手くいくはず」

「そういう問題でもないと思うんだけどなあ…」

燕が小さい頃から面倒を見てきただけあって、竹千代は小さい頃の燕と今の燕の対応の切

り替えがどうも難しい。まあ無理もない話ではあるが、燕からしてみたならたまったものじゃない。

\*

「ああクソ、何でアイツが歳上なんだよ……」

生命の不思議である。歳下の人間は歳上の人間の年齢をいつまで経っても追い越すことはできない。できるとすれば、それは……言葉にしてはいけないことだろう。

「叔父さんと一緒に風呂に入るとか、絶対嫌なんだが」

肩まで湯船に浸かって、燕は悶々と考える。

「絶対、絶対にバカにされる」

二人の思惑は外れていた。燕は目線を下にし、トイレに行く時と夜に布団の中でしか殆ど見ない部位をじっと見つめている。

「……………」

サイズがどうなんて、そんなもの何人何十人と見比べた経験がないから分からないが思うことはただ一つ、ここは身体のサイズと比例していて自分は比較的小さいのではないかと。

竹千代がそういう身体のデリケートな部位について言及するかどうかは正直なところ本人のテンション次第というところだろうが、燕の脳内では竹千代が自分のことをバカにする想像しかできずにいた。

「考えていても仕方が無いけどさ」

現代の技術ではもうどうしようもないことではあるのだ。

「というかココより身長の方がでかくなってほしいよ俺は」

こういう話は同じ男と言えども竹千代には絶対に話せない。持つ者には持たざる者の気持ちなど到底分かるはずもないのだから。

「別に、アイツが背の高い男が好きだとは限らないから！希望は持つべきだ…うん」

「なーにブツブツブツ独り言言ってるの？」

「おわあ！！」

脱衣所から竹千代の声が聞こえた瞬間、燕は飛び上がる。

「タオル、忘れてたみたいだから持ってきたよ。それと、服は着てたやつでいいの？」

寝ぼけていてすっかり忘れていたようだ。燕は少し焦ったものの、深呼吸を一つし竹千代の言葉に返事をする。

「あー、後で部屋で着替えるから、そのままにしといて」

竹千代が風呂に乱入するのではとちらっと思ったが、本気で嫌がっている人間にしでかすほど愚かな人間ではないと理解していたので燕はそれほど慌てることもなかった。

「はいはい」

竹千代の気配が遠ざかっていく、と思ったらまた近づいてきた。

「良かったらお背中、お流しますけどー♪」

お気楽な声が脱衣所と浴室に響く。

「絶対にイ・ヤ！」

「…はいはい」